

## 信州大学附属図書館との職員交流研修

篠田 尚利 (県立長野図書館総務企画課)

槌賀 基範 (県立長野図書館資料情報課)

### 1. 本研修について

信州大学附属図書館（以下、信大図書館）と県立長野図書館（以下、当館）は、平成27年8月21日（金）に長野県内の学術・文化の発展に資することを目的として「信州大学附属図書館と県立長野図書館の連携に関する覚書」（以下、覚書）を交わした。

この覚書の連携・協力事項の一つである「職員の研修・相互交流に関すること」を根拠に、過去当館からは平成28年度に1名、平成30年度と令和元年度をまたぐ形で2名を派遣し、それぞれ4日間の研修で職員相互の資質向上と情報交換を図ってきた。信大図書館から当館へは平成28年度に1名、令和元年度に2名を受入れた。

ほぼ2年ぶりとなる今回の研修は、令和3年8月初旬に日程調整や研修内容の検討を開始し、当館からの派遣は前半が9月13～14日、後半が10月25～26日という日程で実施された。

当館からの派遣職員は総務企画課企画係篠田、資料情報課資料係槌賀の2名である。

篠田は高等学校図書館司書として3校勤務の後当館へ異動し、その後司書として採用された当館職員として初めて、県教育委員会の図書館担当課である文化財・生涯学習課で勤務した経歴を持つ。槌賀は初任で当館に配属され、高等学校図書館司書として1校に勤務の後、再度当館で勤務している。

ともに当館内では中堅からベテランの位置づけとなる職員であるが、長野県の司書職員の異動先の一つである長野県看護大学附属図書館や、旧長野県短期大学附属図書館への勤務経験はなく、大学図書館での研修も初めてであり、新鮮かつ貴重な体験をさせていただいた。

本稿ではこの研修で得られた知見について報告する。

### 2. 研修概要

研修は表1の日程で松本キャンパスにおいて実施された。

前半日程である9月は、大学が夏期休業中であることに加え、長野県全体のコロナ感染症警戒レベルが高い段階にあった。感染症拡大防止のための信州大学の行動基準においても課外活動や施設利用が禁止されており、松本キャンパス内は閑散とした状態であった。

その中でも図書館内では研究に励む学生の姿が見られたが、館内での会話が禁止、制限されているという状況にあり、10月においても前回研修参加者の報告にあった学生たちの活気あふれる学び合いの姿が見られないのは残念であった。学生たちにとっても不本意と思われ、オンライン

の良さを取り込みつつ、対人交流を含めた学習・研究活動が回復することを望んでやまない。

表 1. 令和 3 年度県立長野図書館交流研修（派遣）日程

日程	9月13日（月）	9月14日（火）	10月25日（月）	10月26日（火）
午前	研修ガイダンス 図書館概要	災害アーカイブ展 設営	サービス担当業務 ・館内案内 ・図書館相互協力 ・利用者教育	雑誌担当業務
	図書担当業務から ・業務概要 ・主要コレクション ・電子ブック購入	大学史資料センター ・打合せ参加	昼どきセミナー運営	
午後	オープンアクセス 概要と実務	大学史資料センター ・概要 ・資料整理 ・企画展準備	和古図書目録実習	研修生業務紹介
	「知の連携フォーラム」ディスカッション参加	医学部図書館 ・附属病院こまくさ図書館 ・案内、業務説明	「どこコレ」企画 実施に向けた検討 ミーティング参加	研修振り返り 意見交換

信大図書館での研修プログラムは、当館の今後の事業課題であるとともに、派遣職員2名の担当・関心事項である電子図書館、地域連携、機関リポジトリ、組織の記録保存などを含めていただき、示唆を与えていただく内容が充実したものであった。

また、最終日に「研修生業務紹介」の時間が設けられた。自分の仕事を紹介する機会は、過去にインターンシップや職場体験などの参加者に対してあったものの、業務紹介の準備や、各学部図書館からも御参加いただいた発表の時間を通じて、改めて自身の業務を意義から省みることができた。と同時に、わかりやすく説明する難しさを感じた。

次項では、印象に残ったいくつかの点について記載したい。

### 3. 研修を通じて

#### 3-1. 学術資料

当館では、司書職員により毎週開催されている司書会議の中で様々な検討がなされている。ミッション・ビジョンの策定に向けて重要課題として検討されてきたのが、今後当館は、「何を

収集し何を保存・継承していくのか」という点である。今回の交流研修では、公共図書館としての当館と大学図書館としての信大図書館の資料収集の方針や収集方法の違いなど、興味深く話を聞くことができた。

「県立長野図書館図書資料選定基準」の基本方針には、「県民の資料・情報要求に応えるとともに、市町村立図書館等への支援のため、次に掲げる事項に留意して資料の収集に努める」と書かれており、以下の事項が掲げられている。

- 1 県立図書館としての機能を果たすことのできる一般的資料から専門的資料まで幅広く収集する。
- 2 県民の調査・研究活動の高度化・多様化に対応できる資料を収集する。
- 3 あらゆる分野の資料について、中立・公正な立場から広い視野に立って収集する。
- 4 対立する多様な意見がある問題については、それぞれの観点に立つ資料を収集する。
- 5 郷土資料については、網羅的に収集する。

地域の情報基盤としての当館の役割が、この事項に表現されている。

それに対して、研究機関の附属図書館としての役割を持つ大学図書館の蔵書は、公共図書館とは明らかに別の目的を持って構成されている。図書館の本を買うための予算としてイメージされる資料費は、図書館予算よりも教員予算のほうが多いということに驚きを感じた。

また、当館で検討を進めている電子書籍貸出サービスについて、先行している信州大学の事例を聞くことで大変参考になった。教員が研究のために電子書籍を購入する、コロナ禍で大学に来られない学生が家で電子書籍を読む、そんなことが既に当たり前のこととして受け入れられていることに驚きを感じた。県内公共図書館には、1,000万冊以上の紙の資料が所蔵され活用されているが電子書籍については検討を始めたばかりではある。県民だけでなく図書館職員もまだまだデジタルな情報の活用に及び腰なところも見受けられる。これからは信州大学が契約しているような電子ジャーナルも含め、誰もがデジタルな情報にもアクセスしていることが当たり前の風景となるような図書館を目指したい。

長野県唯一の県立の図書館として、公共図書館だけでなく信州大学をはじめとする大学の図書館とも更に連携を深めながら、当館で立ち上げた「信州ナレッジスクエア」を活用し、長野県の情報基盤を整備していくことの重要性を再認識した時間であった。

### 3-2. 大学史資料センター

戦後70年を迎えた2015年、当館では企画展「発禁 1925-1944；戦時体制下の図書館と知る自由」を実施した<sup>1)</sup>。

この企画展は、この年の3月に地下書庫から偶然再発見された戦前の文書をもとに組み立てたものである。「再発見」としたのは、昭和34年（1959年）に発行された『県立長野図書館三十年史』には戦時中の所蔵資料への干渉の記録として「出版物差押通知受簿」などを保存していたことが記されていたものの、長い間所在が不明であったものが別件調査中に偶然見つかったからである。

当館で扱う資料は、主に著作物の複製物である図書や逐次刊行物などであり、文書、記録のようないわゆる「一点もの」にはあまり縁がない。しかし、この企画展で使用した昭和8年から19年までの記録類には電話を受信した日時、職員の名前や印影等が記録され、当時の図書館の活動の一端を確実に伝える文書の保存の大切さを感じさせるものであった。

『三十年史』の発行の後、『五十年史』が昭和56年（1981年）に発行された。しかしその後は年史が発行されていない。昭和49年度以降は各年度の「図書館概要」という形で記録を残しているものの、図書館の営みがどの程度後代に伝えられるか不安がある。榎賀は日本図書館協会の依頼で『日本の図書館の歩み：1993 - 2017』（2021年3月）の長野県部分の原稿を執筆したが、該当期間である平成期の当館の活動を記述するための資料収集に苦労したこともある。

こうした現状や企画展の経験、近年の公文書保存の問題もあり、組織の活動記録を伝えることに関心を持っていたため、大学史資料センターでの研修には興味を持って参加した。

まず印象に残ったのは、開学70周年を機に呼びかけた卒業生ら関係者への資料提供の呼びかけが遅く、開学から20年分の資料を収集するタイミングを逸してしまった、ということである。適切なタイミングを逃さないこと、記念事業的に行うだけでなく、計画的な収集を継続することが重要であるという省察は、例えば戦争史資料の収集にも共通することだろう。

榎賀は信州大学人文学部の卒業生であるが、10月29日からの開催に向けて準備されていた企画展のテーマである「SUNS」については、恥ずかしながら初耳（入学数年前に整備されていたにも関わらず）であった。県内5か所にキャンパスが分散する信州大学にとっての課題であったキャンパス間の教育、研究の連携を進めるために行われた地形調査、申請書類、工事記録、広報等の一連の記録には、この事業の大学史上の重要な位置づけを感じることができた。

収集した資料については、記念事業の実施、映像作成、企画展等を通じて大学を取り巻く地域社会において、大学の価値を高める一助となった、という話があった。

最近、当館が現在地へ移転した際（1979年）に、文書館を併設する構想があったことを大学史資料センターの福島先生から御教示いただいた。このことは『五十年史』に記載があるが、福島先生からの依頼を受けて調査した結果、今まで存在が認識されていなかった関連資料が館内で見つかった、ということがあった<sup>2)</sup>。また、当館の前身にあたる信濃図書館は、信濃教育会が設立、運営し、昭和4年の当館開館時にほとんどの資料を当館が継承しているが、資料の一部が当館の蔵書として登録されておらず、存在が知られていない、ということも気になっていた。

後者の資料については、おそらく他の図書館でも所蔵があり、当館があえて存在をアピールする必要がないのかもしれないが、当館の歴史を語る上で重要な資料であることは間違いない。移転時にとりあえず持ち込んだまま、未整理の館史に関わる資料というものがまだあると思われる。こうした資料を整理、組織化、公開することで、地域の「知の基盤」として当館が果たしてきた価値も新たに認識されることになると考えている。

組織の価値を高めるための記録という視点から、こうした自館史に関する資料整理業務もきちんと位置づけたいと考えさせられた時間であった。

#### 4. 終わりに

4日間で大学図書館の業務のひとつおりを説明いただき、図書館という世界の奥深さを再認識した。また、ルーティンに紛れて新たな館のビジョンに見合った新たな取組みに踏み出せない現況を変えていきたいという刺激を受けることができた。

当館でも長野県リポジトリ（仮）構想があり、技術面でまだ具体的な開始の見通しが立っていないものの、令和3年6月に実施していただいた研修を通じたり、今回紹介いただいた信州大学のオープンアクセス方針を拝見して、地域における研究成果の発信に向けて、「開かれた知の集積地」として、明確なリーダーシップをとっていく必要を感じた。

篠田、槌賀ともに、今回準備ミーティングが研修日程に含まれていた「信州・知の連携フォーラム」や過去の研修を通じて、一部の信大図書館の職員の方々とは面識を得ていた。しかし、今回の研修で多くの方々と直接お会いして、顔の見える関係づくりができたのではないかと思う。オンラインにはオンラインの良さがある一方、このように現地研修の意義を伝え、今後の当館職員にも研修の機会を引き継いでいくことは、研修を受けた者、また先に「中堅からベテラン」と自らを紹介したが、その立場にある者の責務であると感じている。

槌賀にとっては卒業以来20数年ぶり、改装されてからは初めての中央図書館訪問となり、お世話になった学生時代の旧館を思い出しながらの感慨深い研修となった。

研修日程の調整が始まった8月初旬は、後のコロナ感染症陽性者数増加第5波の入口となる段階にあり、8月下旬には全県の警戒レベルが5に引き上げられる事態となった。学外利用者が制限されている状況下で研修が実施できないことも危惧されたが、4日にわたる研修を御提供くださり、丁寧に御対応いただいた信州大学附属図書館の皆様に心から感謝申し上げる。

---

#### 注

- 1) 槌賀基範(2016)「県立長野図書館 戦後70年特別企画「発禁 1925-1944：戦時体制下の図書館と知る自由」を開催して」『図書館雑誌』110(2), p. 74-75.
- 2) 該当資料は『県立図書館文書館情報センター総合施設建設構想(案)』として「信州デジタルcommons」で公開。<https://www.ro-da.jp/shinshu-dcommons/library/02AD0114927163>

#### 参考文献

- 小澤多美子(2018)「信州大学附属図書館における職員交流研修報告：公共図書館員が見た大学図書館」『信州大学附属図書館研究』Vol. 7, p. 231-236.
- 朝倉久美、畔上友里(2020)「共につむぐ“知の拠点”をめざして—信州大学附属図書館と県立長野図書館の職員交流研修報告—」『信州大学附属図書館研究』Vol. 9, p. 223-228.